

株式会社オフィスビル総合研究所
本田広昭

eメール、インターネット検索、もう1台のモバイルノート型パソコンなど、仕事でパソコンを使うのは当たり前になった。自宅でも子供たちが思い思いにパソコンをテレビ代わりに使っている風景は珍しくもなく、さらに家族全員が携帯電話を使うことも加わり、日本はアツという間にIT社会に突入した。最近はめっきりFAXが来なくなったことにお気付きでない方はいらっしゃるだろうか。

一方、IT社会でオフィスはどのように変化したのか？紙とペンと消しゴムと辞書と書庫はパソコンに取って代わり、昔のデスクトップ型と違い机の上に楽に置けるようになったが、書類の山は相も変わらず。面会の約束や書類のやり取り、お知らせなど、ビジネスシーンにおけるeメールや携帯電話は欠かせないコミュニケーションツールとなり、ITを道具として使いこなす便利さを実感している日々である。・・・しかしおそらく、普通のオフィスではこの程度であり意外と変わっていないのである。

未体験のIT社会に不安を感じていた数年前とは大違いで、道具としての便利さを享受している一方で、当たり前と言えは当たり前だが、コンピュータにはできないことをこともなげにやってしまう“人間力”の方に注目が集まる時代になったのではないだろうか。

オフィスは人（知識や技術）が集い、情報交換（コラボレーション）を通じて新しい付加価値を生み出す“知的生産の場”であり、ITはその道具でしかないことが判ってきた。

オフィスは“人が集まる価値を提供する場”であると理解した場合、オフィスのカタチはそこから見えてくるはずだ。人は感情の動物である以上、快適に、美しく、感動的に、より便利に、そして道具としてのITを使いこなせることが21世紀のオフィス像ではないだろうか。

